

スワヒリ語の kweli 「本当」の由来に関する Kiga 語からの考察

梶 茂 樹*

要 旨

スワヒリ語の単語 kweli 「本当」は 1 語として化石化し、形態素分析の対象となっていない。しかしウガンダ西部の Kiga 語の例を用いて、この語は元々 2 語 4 形態素からなるものであることを示す。スワヒリ語の kweli 「本当」に対応する表現はバンツー系の他の言語にもある。Kiga 語では kw'è:ri である。これは Ní kw'è:ri. < Ní kwó eri. 「それ (= 状況) はその様にある。」からフォーカスマーカの Ní を取り除いたもので、スワヒリ語同様、間投詞的に「本当」という意味でよく用いられる。kwó はクラス 17 の独立代名詞、eri の e- はクラス 9 の主語接頭辞、そして -ri は be 動詞である。主語接頭辞がクラス 9 であるのは、クラス 9 の名詞 embé:ra 「状況」を念頭に置いているからである。スワヒリ語でもクラス 9 の名詞 hali 「状況」を念頭に置いていると考えられるが、主語接頭辞が i- ではなく e- となっている。この点の解明は更に考察を要する。

キーワード：スワヒリ語, kweli, Kiga 語, kw'è:ri, 間投詞

1. はじめに

スワヒリ語に kweli という単語がある。日常的によく用いられる語で、人に何かを言われた時に、「本当?」と聞き返す時や、ya kweli などの形で「本当の」の意味を表す表現として普通に用いられる。スワヒリ語ではこの kweli という語は 1 形態素の単語であると思われる。あまりに日常的な語なので、教える側も習う側も、そういうものだと思って深く詮索しない。筆者は本稿で、この語は、元々 2 語 4 形態素からなるものであることを示そうと思う。

ただし、これは現代スワヒリ語を見ていては分からない。また過去の記録されたスワヒリ語を見ても分からないであろう。ではなぜ筆者が分かるかと言えば、スワヒリ語と同じバンツー系の多くの言語を調査し、その中にスワヒリ語以外にも kweli を使う言語があるからである。本稿では筆者が現在調査しているウガンダ西部に話される Kiga 語の例を用いて、この語がどのような構成になっているかを明らかにしたい。周辺の Nkore 語や Nyoro 語でもほぼ同様のことが言える。ただし、分からないスワヒリ語のことを Kiga 語で解釈しようというわけであるから、すべてが分かるわけではない。

* 京都産業大学総合学術研究所ことばの科学研究センター

現時点で分かっていることだけを述べる。

2. Kiga 語の kw'ê:ri

スワヒリ語の kweli に対応する Kiga 語の形は kw'ê:ri である。これはスワヒリ語同様 (1) のような用いられ方をする。

- (1) a. Ndakukû:nda.¹ 「君が好きなんだ。」
 b. Kw'ê:ri? 「本当?」

(1b) の Kiga 語の kw'ê:ri の用いられ方はスワヒリ語の kweli と同じである。ただ Kiga 語の場合は、半信半疑で驚いた時によく用いられる。スワヒリ語でもそういう使われ方をすることが多い。この Kiga 語の表現は決してスワヒリ語から借用されたものではない。またスワヒリ語の kweli も Kiga 語から借用されたものではない。どちらの言語にも昔からある表現である。ただスワヒリ語では表現が化石化していて物の全体像が見えない。それに対して Kiga 語などでは類する表現が多くあり、物の全体像が掴みやすい。まず (2) に (1) の形態素分析を示す。

- (2) a. Ndakukû:nda.
 n-da-ku-kúnd-a
 I-Prs-you (sg.)-love-FV²
 「君が好きなんだ。」
 b. Kw'ê:ri?
 ku-ó e-ri
 PPr.cl.17-PPrV SPr.cl.9-be
 「本当?」

(2b) の ku- はクラス 17³ のクラス接頭辞である。Kiga 語の接頭辞には、名詞接頭辞、代名詞接頭辞、動詞の主語接頭辞など、幾つかの種類があるが、クラス 17 の場合は、形はすべて ku- である。その後に続く母音 -ó は代名詞化母音である⁴。ku- と -ó が合わさってクラス 17 の独立代名詞 kwó ができる。独立代名詞というのは単独で用いることができる代名詞のことである。フランス語で、動詞にくっついて主語標識としてのみ機能する je 「私」と C'est moi. 「私です。」のように自立して存在できる moi 「私」を比べると分かりやすい。後者が独立代名詞である。クラス 17 は Kiga 語に 4 つある場所クラスの 1 つである。場所クラスというのは便宜的名称で、場所のみならず時間や様態も表す。ここの独立代名詞 kwó は様態の「その様なこと」を意味する。この点は 3 節でも述べる。

(2b) の e-ri の e- はクラス 9 の主語接頭辞であると筆者は考えている。ただし、be 動詞の前に 1

個だけ付いているので主語接頭辞であることは間違いないが、それがクラス 9 の主語接頭辞であるかどうかは再考の余地があるかもしれない。e- と同じ主語接頭辞を取るものにはクラス 4 があるからである⁵。筆者がクラス 9 と考える理由は 6 節で述べる。

e-ri の -ri は be 動詞である。スワヒリ語では -li となるが、この流音は言語によって様々である。Kiga 語や Nkore 語では r [r] であるが、Nyoro 語やスワヒリ語などは l [l] となる。(2b) の ku-ó e-ri がどの様に kw'è:ri になるかを示したのが (3) である。

- (3) a. ku-ó e-ri (cf. クラス 10 の場合 : ku-ó zi-ri)
 b. kwó: e-ri (cf. クラス 10 の場合 : kwó: zi-ri)
 c. kwó e-ri (cf. クラス 10 の場合 : kwó zi-ri)
 d. kw'è:ri (cf. クラス 10 の場合 : kwó zi-ri)

まず (3a) の ku-ó が kwó となる。その際、母音 u が音節性を失うため後続の ó に代償延長が起き kwó: となる (3b)。ただし、Kiga 語では語末音節は 2 モーラを許容できず ó: が ó となるため、kwó: は kwó となる (3c)。次に、この kwó と eri の e- が合わさって kw'è: となる。è の母音が長くなるのは母音 ó が消失した代償延長である。この長音性は消えない。kw'è:ri で 1 語となり、語末ではないからである。アポストロフィ ' は母音 ó の省略を表す。母音 ó は消えてもその高声調は消えず e- の低声調と組み合わさって下降調 è: が生じる (3d)⁶。次節で、この ku-ó や e-ri がどの様に Kiga 語で用いられているかを示す。これでほぼ全体像が見えてくる。

3. 独立代名詞

まず Kiga 語の独立代名詞を人称・クラスごとに (4) に示す⁷。Kiga 語には名詞のクラスが 21 あり、それぞれに応じて独立代名詞の形は異なる。ただし異なるのはクラス接辞の部分のみで、すべてのクラス接辞に代名詞化母音 -ó が付いて独立代名詞ができる。ただし「私」「あなた」などの人称の部分は、母音 -ó の代わりに -e が付くなど、形が少し異なる。それぞれの意味はいちいち示さないが、「私」「あなた」「彼(女)」「それ」「それら」などとなる。

(4)	単数	複数
1. ⁸ 1 人称	nyówe (～ inye) ⁹	2. itwe
2 人称	iwe	imwe
3 人称	wé	bó
3.	gwó	4. yó
5.	ryó	6. gó
7.	kyó	8. byó

9.	yó	10.	zó
11.	rwó		
12.	kó	14.	bwó
		13.	twó
15.	kwó	6.	gó
16.	hó		
17.	kwó		
18.	mwó		
19.	gwó	20.	gó
21.	yó		

kw'ê:ri (< kwó eri) の kwó に当たる部分は (4) の独立代名詞の内, クラス 17 の kwó である。kwó となるのはクラス 17 以外にもクラス 15 の場合があるが, 筆者がクラス 15 ではなくクラス 17 と考える理由は, クラス 17 がいわゆる場所クラスであり, 様態を表すからである。クラス 17 は場所, 時間, 様態を表すが, クラス 15 は動詞の不定形 (動名詞) と幾つかの名詞が含まれるだけで, 場所, 時間, 様態を表さない。なぜ様態が kw'ê:ri に関係するかと言えば, この kw'ê:ri というのは「その様にある」というのが本来の意味だからである。これを説明するには Kiga 語の be 動詞について触れる必要がある。

4. be 動詞

Kiga 語の be 動詞は -bá- (不定形 okúba) と -ri (不定形なし) の 2 つである。この 2 つは存在を表す動詞としても, またコピュラとしても用いられる。-bá- は様々な活用形で用いられる普通の動詞であるが, -ri は限られた時制にしか用いられない欠如動詞である。スワヒリ語も同様で, Kiga 語の -bá- に対応する -wa- (不定形 kuwa) と -ri に対応する -li (不定形なし) の 2 つがある。しかしスワヒリ語では -li はほとんど用いられない¹⁰。この点が問題なのであるが, これはひとまず置いて, Kiga 語の欠如動詞 -ri の人称・クラスごとの形を (5) に示す。動詞の定形には主語接頭辞が必要で, これをハイフンの前半部分で示してある。クラス 16, 17, 18, 21 が Kiga 語の場所クラスであるが, クラス 17, 18, 21 の主語接頭辞は用いられない。必要に応じてクラス 16 の ha- で代用する。

(5)	単数	複数
1. 1 人称	n-di	2. tu-ri
2 人称	o-ri	mu-ri
3 人称	a-ri	ba-ri
3.	gu-ri	4. e-ri

- | | | | |
|-----|----------------|-----|-------|
| 5. | ri-ri | 6. | ga-ri |
| 7. | ki-ri | 8. | bi-ri |
| 9. | e-ri | 10. | zi-ri |
| 11. | ru-ri | 10. | zi-ri |
| 12. | ka-ri | 14. | bu-ri |
| 13. | tu-ri | | |
| 14. | bu-ri | 6. | ga-ri |
| 15. | ku-ri | 6. | ga-ri |
| 16. | ha-ri | | |
| 17. | *ku-ri (ha-ri) | | |
| 18. | *mu-ri (ha-ri) | | |
| 19. | gu-ri | 20. | ga-ri |
| 21. | *e-ri (ha-ri) | | |

5. 焦点化

英語に分裂文 (cleft sentence) という構文がある。中学校の英語で習う構文で、例えば It is John who went. 「行ったのはジョンである。」のようなものである。これは John went. 「ジョンが行った。」とは異なって、ジョンを新たな情報として焦点化し提示する方法である。この構文は恐らく世界の言語にあるのであろう。Kiga 語の人称・クラスごとにこの形を示すと (6) のようになる。用いた動詞は -gu- (不定形 okugwa) 「転ぶ, 倒れる」で、時制は現在完了形である。(6) で文頭に用いられている ní は動詞ではなく接語で英語の it is に当たる一種のフォーカスマーカーである (人称・クラスによる変化はない)。文の意味は人称・クラスに応じて「倒れたのは私である」(It is me who have fallen), 「倒れたのはそれである」(It is it that has fallen), 「倒れたのはそれらである」(It is them that have fallen) などとなる。

- | (6) | 単数 | 複数 |
|-----|--|---------------------------------------|
| 1. | 1 人称 Ní inye nâ:gwa. ¹¹ → Ní:nye nâ:gwa. | 2. Ní itwe twâ:gwa. → Ní:twē twâ:gwa. |
| | 2 人称 Ní iwe wâ:gwa. → Ní:we wâ:gwa. | Ní imwe mwâ:gwa. → Ní:mwe mwâ:gwa. |
| | 3 人称 Ní wé wâ:gwa. | Ní bó bâ:gwa. |
| 3. | Ní gwó gwâ:gwa. | 4. Ní yó yâ:gwa. |
| 5. | Ní ryó ryâ:gwa. | 6. Ní gó gâ:gwa. |
| 7. | Ní kyó kyâ:gwa. | 8. Ní byó byâ:gwa. |
| 9. | Ní yó yâ:gwa. | 10. Ní zó zâ:gwa. |
| 11. | Ní rwó rwâ:gwa. | |

- | | | |
|-----|-----------------------------------|---------------------|
| 12. | Ní kó kâ:gwa. | 14. Ní bwó bwâ:gwa. |
| | | 13. Ní twó twâ:gwa. |
| 14. | Ní bwó bwâ:gwa. | 6. Ní gó gâ:gwa. |
| 15. | Ní kó kwâ:gwa. | 6. Ní gó gâ:gwa. |
| 16. | Ní hó hâ:gwa. | |
| 17. | *Ní kwó kwâ:gwa. (Ní kwó hâ:gwa.) | |
| 18. | *Ní mwó mwâ:gwa. (Ní mwó hâ:gwa.) | |
| 19. | Ní gwó gwâ:gwa. | 20. Ní gó gâ:gwa. |
| 21. | *Ní yó yâ:gwa. (Ní yó hâ:gwa.) | |

この構文で特徴的なことは動詞が主語関係節形になっていることである。なぜ動詞が主語関係節形になっているかと言えば、「私」「あなた」「彼(女)」「それ」などの焦点化されたものが動詞の主語になるからである。日本語でも「倒れたのは」のところの動詞は連体形となる。もし動詞の主語が焦点化されたものでなければ、動詞の関係節形は用いられない。(7) の例では焦点化されているのはクラス 17 で示される様態である。従って、動詞は関係節形になっていない。倒れる様態と倒れる主体とは主語・述語の関係はない。倒れる主体はそれぞれの人称・クラスの人、物である。(7) のそれぞれの文の意味は「私が倒れたのはその様にである」(It is how I have fallen), 「それが倒れたのはその様にである」(It is how it has fallen) などとなる。

- | | | |
|---------|-----------------------------------|---------------------|
| (7) | 単数 | 複数 |
| 1. 1 人称 | Ní kwó ná:gwa. | 2. Ní kwó twá:gwa. |
| 2 人称 | Ní kwó wá:gwa. | Ní kwó mwá:gwa. |
| 3 人称 | Ní kwó yá:gwa. | Ní kwó bá:gwa. |
| 3. | Ní kwó gwá:gwa. | 4. Ní kwó yá:gwa. |
| 5. | Ní kwó ryá:gwa. | 6. Ní kwó gá:gwa. |
| 7. | Ní kwó kyá:gwa. | 8. Ní kwó byá:gwa. |
| 9. | Ní kwó yá:gwa. | 10. Ní kwó zá:gwa. |
| 11. | Ní kwó rwá:gwa. | 10. Ní kwó zá:gwa. |
| 12. | Ní kwó ká:gwa. | 14. Ní kwó bwá:gwa. |
| | | 13. Ní kwó twá:gwa. |
| 14. | Ní kwó bwá:gwa. | 6. Ní kwó gá:gwa. |
| 15. | Ní kwó kwá:gwa. | 6. Ní kwó gá:gwa. |
| 16. | Ní kwó há:gwa. | |
| 17. | *Ní kwó kwá:gwa. (Ní kwó há:gwa.) | |

18. *Ní kwó mwá:gwa. (Ní kwó há:gwa.)
 19. Ní kwó gwá:gwa. 20. Ní kwó gá:gwa.
 21. *Ní kwó yá:gwa. (Ní kwó há:gwa.)

6. be 動詞との組み合わせ

(8) で示したものは (7) の動詞を be 動詞の -ri に変えたものである。それぞれの文の意味は「私がある (存在する) のはその様にである」(It is how I am), 「それがある (存在する) のはその様にである」(It is how it is) などとなる。

(8)	単数	複数
1. 1 人称	Ní kwó ndi. → Ní kwô:ndi.	2. Ní kwó turi.
2 人称	Ní kwó ori. → Ní kwô:ri.	Ní kwó muri.
3 人称	Ní kwó ari. → Ní kw'â:ri.	Ní kwó bari.
3.	Ní kwó guri.	4. Ní kwó eri. → Ní kw'ê:ri.
5.	Ní kwó riri.	6. Ní kwó gari.
7.	Ní kwó kiri.	8. Ní kwó biri.
9.	Ní kwó eri. → Ní kw'ê:ri.	10. Ní kwó ziri.
11.	Ní kwó ruri.	
12.	Ní kwó kari.	13. Ní kwó turi.
14.	Ní kwó buri.	6. Ní kwó gari.
15.	Ní kwó kuri.	6. Ní kwó gari.
16.	Ní kwó hari.	
17.	*Ní kwó kuri. (Ní kwó hari.)	
18.	*Ní kwó muri. (Ní kwó hari.)	
19.	Ní kwó guri.	20. Ní kwó gari.
21.	*Ní kwó yari. (Ní kwó hari.)	

ここで 2 節で提出した、なぜ e-ri の e- はクラス 9 の主語接頭辞であると筆者が考える理由を述べる。それは、e-ri の e- がクラス 9 の名詞 embé:ra 「状態, 状況」を指していると考えられるからである。つまり、(9) のような文が想定されていると考えるのである。そして (9) の文から主語名詞 embé:ra 「状態, 状況」を除いたものが (8) のクラス 9 に対応した Ní kw'ê:ri (< Ní kwó eri) である。

- (9) Ní kwó e-m-bé:ra e-ri.
 it.is how.cl17 Aug-NPr.cl.9-situation SPr.cl.9-be
 「状況はその様にある。」

kw'ê:ri は Ní kw'ê:ri. から Ní を取ったものである。Ní kw'ê:ri. は「それはその様にある。」という一文であるが、これから Ní を取ってしまうと文にはならない。副詞的あるいは間投詞的に用いられる。これが Kiga 語の kw'ê:ri であり、スワヒリ語の kweli である。

7. 幾つかの問題点

ただ以上の解釈には幾つかの問題が残る。まず、Kiga 語の (9) に相当する文がスワヒリ語で想定されるかどうかということがある。もしあったとすれば (10) のようなものであろう。

- (10) ?Ni ko hali i-li.
 it.is how.cl.17 situation.cl.9 SPr.cl.9-be
 「状況はその様にある。」

Kiga 語の ní はスワヒリ語にもある。同じく ni である。そして Kiga 語のクラス 9 の名詞 embé:ra 「状態, 状況」に相当するスワヒリ語の単語としては、同じくクラス 9 の名詞 hali 「状態, 状況」が考えられる。問題は ko と i-li である。

Kiga 語では kwó などの独立代名詞は様々なクラスで用いられるが、スワヒリ語ではこの形は、少なくとも標準語では独立代名詞として用いられることはなく、普通に見られるのは、関係節で関係代名詞としてである。(11) における -vyo- のような例である。-vyo- はクラス 8 の接頭辞 -vi- に代名詞化母音 o が加わったものである (-vi-o- > vyo)。 (10) で ko としたのも同様に、クラス 17 の接頭辞 -ku- に代名詞化母音 o が加わったものである。ただしスワヒリ語では -ku-o- において u は w を経て消える (-ku-o- > kwo > ko)。

- (11) Fany-a u-na-vyo-pend-a.
 do-FV you (sg.)-Prs-how.cl.8-like-FV
 「お前の好きなようにしろ。」

残る問題は be 動詞の主語接頭辞が e- ではなくて i- である点である。この点については現在のところ十分な答えを持ち合わせていない。ただ、様々なバンツー系の言語を見ると、5 母音体系の言語では e と i はしばしば交替するのが見られる。例えば、Kiga 語の南には Rwanda 語が話されているが、その前接母音は後に続く名詞接頭辞の母音と同じものである (12b)。しかし Kiga 語では前接母音は

名詞接頭辞の母音より舌の位置が一段低いものになる (12a)。つまり Rwanda 語で u-, i- であるものが Kiga 語では、それぞれ o-, e- となる。

- | | | | | |
|------|----|----------|---------------------|--------------------|
| (12) | a. | Kiga 語 | o-mu-ntu 「人」 | e-kí-ti 「棒」 |
| | | | Aug-NPr.cl.1-person | Aug-NPr.cl.7-stick |
| | b. | Rwanda 語 | u-mu-ntu 「人」 | i-gí-ti 「木」 |
| | | | Aug-NPr.cl.1-person | Aug-NPr.cl.7-tree |

また Kiga 語のクラス 9 の主語接頭辞自体も一見 e- ではなく i- かと思うような状況が生じている。それは (7) のクラス 9 の文のように後に母音始まりのテンス・アスペクト・ムード標識が続く場合である。(13b) に (7) のクラス 9 の文を再録し、動詞形にグロスを付ける。対比的にクラス 7 の場合も (13a) に示す。

- (13) a. Ní kwó kyá:gwa.
 ní kwó ki-a-gu-á
 it.is how.cl.17 SPr.cl.7-AspM-fall-FV
 「それが倒れたのはその様にである。」
- b. Ní kwó yá:gwa. (=7)
 ní kwó i (?) -a-gu-á
 it.is how.cl.17 SPr.cl.9-AspM-fall-FV
 「それが倒れたのはその様にである。」

(13b) の yá:gwa の i > y [j] は一見クラス 9 の主語接頭辞のように見えるが、本来はそうではない。クラス 9 の本来の主語接頭辞は i- ではなく、やはり e- である。そして e- の後に母音が続くと、母音 2 個が連続することになり、それを避けるために y [j] を挿入するのである。つまり本来の動詞形は e-a-gu-á である。そして、e-a の間に y [j] が挿入され e-a-gu-á > e-y-a-gu-á > eyá:gwa となる。しかし、そうなると語頭の e- があたかもクラス 9 の前接母音のように見えるため本来の主語接頭辞である e- を消しているのである。これが現在ろうじてクラス 9 の主語接頭辞が e- であると認められる理由であるが、時間が経てば恐らく（あるいは現在でも既に）y [j] 自体がクラス 9 の主語接頭辞と認識されてくるのであろう。実際、既にクラス 9 の主語接頭辞は、後に子音が続く場合は e-, そして母音が続く場合は i- のように 2 種類あるように見える。

以上は Kiga 語での e と i の交替であるが、同じようなことがスワヒリ語でも生じたかどうかは分からない。識者の教示を乞うところである。

8. 終わりに

本稿は、現代スワヒリ語の単語 kweli 「本当」の由来について考察したものである。この語は表現が化石化しており、スワヒリ語ではもはや形態素分析ができないものになっている。スワヒリ語研究においてその由来を考えるということは、筆者の知る限り行われていない。しかし同じ系統の様々な言語にも kweli 「本当」に似た表現はあり、そこに幾つもの形態素が絡んでいることが分かってくる。本稿はウガンダ西部に話される Kiga 語を例に取り、Kiga 語からこの語を見るとどの様に分析できるかを考察した。Kiga 語では kw'è:ri であり、スワヒリ語とほぼ同様の用いられ方をする¹²。そしてこの kw'è:ri は Ní kw'è:ri. 「それはその様にある。」からフォーカスマーカーの Ní を除いたもので、副詞的あるいは間投詞的に用いられるのである。

以上が本稿で述べたことであるが、1 つ問題として残ったのはスワヒリ語の kweli が kwo e-li から由来するとしたらクラス 9 の主語接頭辞がなぜ e- であるかという点である。現代のスワヒリ語では i- であるからである。この点については更なる考察が必要である。

注

- 1 本稿での Kiga 語表記は、声調表記と母音の長音記号：を別としてほぼ正書法に従う。ただし正書法は Kiga 語の北に話される Nkore 語と共通のものを使用しており、Kiga 語の実際の発音は正書法とかけ離れていることがある。例えば byó, bwó はそれぞれ硬口蓋化、軟口蓋化を起こし [bʲó], [bɡó] などとなる。この点は本稿の趣旨に影響しないので本稿での表記に反映しない。この点について詳しくは Kaji (2024) 参照。
- 2 本稿で用いる略語は次の通り。AspM (aspect marker) : アスペクト標識, Aug (augment) : 前接辞 (一種の冠詞), cl (class) : 名詞のクラス, FV (final vowel) : 動詞語尾母音, NPr (nominal prefix) : 名詞接頭辞, PPr (pronominal prefix) : 代名詞接頭辞, PPrV (pronominal prefix vowel) : 代名詞化母音, Prs (present) : 現在, SPr (subject prefix) : 主語接頭辞。
- 3 Kiga 語やスワヒリ語などのパンツ系多くの言語はクラス言語で、名詞は形態・統語的基準により幾つものクラスに分かれる。Kiga 語ではクラスは 21 あり (1 から 21 まで番号が振られている)、多くは、クラス 1 とクラスは 2, クラス 3 とクラス 4 のように、2 つのクラスがペアになり、一方が名詞の単数形、そしてもう一方がその複数形を示す。また、単複同形や、単数でしか用いられないもの、複数でしか用いられないものもある。付加形容詞や代名詞、また動詞定形の主語接頭辞などは統語的に関係する名詞のクラスに一致した形を取る。
- 4 (4) で見るように、母音 -ó の代わりに -é が用いられることがある。特に 3 人称単数形の「彼 (女)」は wó ではなくて wé となる。またクラス 3 の形も kwó が普通であるが、稀に kwé も用いられる。詳しくは Kaji (2023) 参照。
- 5 場所クラスのクラス 21 も主語接頭辞は e- であるが、クラス 21 の主語接頭辞は用いられない。
- 6 (3) の () の中にクラス 9 の複数形であるクラス 10 の場合を示しておいた。クラス 10 の場合は主語接頭辞がクラス 9 のように母音始まりではなく zi- という子音始まりであるため母音接触が起こらず、このあたりの事情が分かりやすい。
- 7 (4) などの Kiga 語の形は Kaji (2023) から取っている。
- 8 ここの 1, 2, 3, 4 などの数字は注 3 で述べた名詞のクラス番号である。単数 (左側) とその複数 (右側) をペアにして示してある。なお本稿では 1 人称, 2 人称, 3 人称は、意味的に人間を表すクラス 1 とクラス 2

の内部区分としてある。(5), (6), (7), (8) も同様である。

- 9 「私」には nyówe と inye の2つの形がある。inye は少し古い形で、通常は nyówe であるが、4 節の焦点化で述べる ní と一緒に用いられる場合は inye を用いる。
- 10 この -li がスワヒリ語では化石化していることは、スワヒリ語の ndiyo 「はい」の由来を考察した際にも述べた。梶 (2021) 参照。
- 11 「私」は注 9 で述べたように、ní と一緒に用いられる場合は nyówe ではなく inye となる。
- 12 ほぼ同様の用いられ方をするのは、kw'è:ri が副詞的あるいは間投詞的に用いられる場合のみであって、すべてのスワヒリ語の kweli の用法が Kiga 語の kw'è:ri にあるわけではない。例えば、スワヒリ語では kweli は連結辞と組み合わせあって「本当の」のような形で形容詞的に用いられるが (rafiki wa kweli 「真の友人」など)、このような場合は Kiga 語では別の単語 amazima 6 「真実」を用い、omuntu w'ámazima (< omuntu wá amazima) 「真実の人、正直な人」のような表現をする。

参考文献

- 梶 茂樹 (2021) 「スワヒリ語の ndiyo 「はい」の由来に関するニョロ語からの考察」『アフリカ研究』第 99 号, pp.13-20.
- Kaji, Shigeki (2023) *A Rukiga Vocabulary*. Kyoto: Shoukadoh for the Center for the Language Studies.
- Kaji, Shigeki (2024) Palatalization and Velarization in Rukiga Pronunciation. To appear in *Working Papers in African Linguistics* 3.

Source of the Swahili Word *kweli* “really”: Consideration from Kiga and other Bantu Languages

Shigeki KAJI

Abstract

The Swahili word *kweli* “really” is commonly used in daily life. Its form is fossilized and does not admit of morphological analysis. However, we find forms similar to it in other Bantu languages. In Kiga, for example, spoken in southwestern Uganda, the expression *kw'ê:ri* is used in similar contexts to those seen for *kweli* of Swahili. In Kiga, it derives from the sentence *Ni kw'ê:ri*. < *Ni kwó eri*. “It is how it is.” omitting the focus marker *ní*. It is used as an interjection as in Swahili. *Kwó* is the class 17 independent pronoun and *e-* of *e-ri* is the class 9 subject prefix followed by the be-verb *-ri*. The class 9 subject prefix is used because it presupposes the class 9 word *embé:ra* “situation”. In Swahili, we can also infer the class 9 word *hali* “situation”. One question remains unsolved in this analysis: why is the class 9 subject prefix *e-* and not *i-* in Swahili? Further research is required to clarify this problem.

Keywords : Swahili, *kweli*, Kiga, *kw'ê:ri*, interjection